

# サルトルとイタリア (2)

澤 田 直

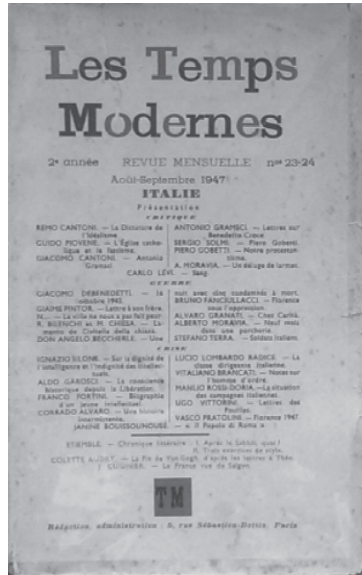
承前

## 2 イタリア知識人との交流

長年にわたる定期的かつ長期間のイタリア滞在をとおして、サルトルは多くのイタリア知識人と交流したわけだが、その主なものについて確認することにしたい<sup>1)</sup>。具体的な交流の多くが始まったのは46年だったが、親疎の差はあるといえ、その後も交際は長きにわたって続くことになる。

もともと関係の深い両国とはいえ、ほんの数年前まで、敵国同士だった間柄である。双方にわだかまりはなかったのだろうか。だが、実際には、わだかまりはほとんどなかった。というより、事態はまったく逆で、共通点のほうが多かったのであり、戦勝国と敗戦国という関係も問題にならなかった。サルトルが交流したイタリア作家の多くは、ほぼ同年代、左翼思想の持ち主で、ムッソリーニ時代には反ファシズムの活動をしていたレジスタンスの闘士たちだった。その意味で、戦後復興の状況で彼らは協働して新たな文化を築くことを目指していたからである。

サルトル側からのイタリアへの関心について言えば、芸術や文化一般はもちろんだが、クローチェやグラムシといった重要な思想家への関心も無視できないだろう。獄中死したグラムシの遺稿がエйнаウディ出版から刊行されるのも戦後のこの時期であり、1945年にサルトルが主幹として立ち上げた『レ・タン・モデルヌ *Les Temps Modernes*』(以下、TM誌と略記)は、47年の「イタリア特集号」にいち早くグラムシのテキストを掲載している<sup>2)</sup> [図版1]。その一方で、サルトルの作品もイタリア語に次々と翻訳された。47年には『嘔吐』『壁』が、48年には『イマジネール』がトリノのエйнаウディ出版から出版された<sup>3)</sup>。さらに交流の深さを示すのが、TM誌の「アメリカ特集号」のイタリア語翻訳の出版である<sup>4)</sup>。こういった活動のいずれもが、イタリアの知識人たちの全面的協力なしには不



【図版1】『現代』誌，イタリア特集号

可能だったことは言うまでもない。

## 2.1 作家・芸術家

まずは、サルトルと交際があった作家たちから見ることにする。当時のイタリアは、いわゆるネオ・リアリズムの全盛期であった。サルトルは、彼らに出会う以前に、すでに作品を読んでいたり、噂を聞いていたりしたことも多かったため、話題には事欠かなかったし、イタリア人たちのほうでも、世界を席卷しつつあった実存主義に無関心ではいられなかった。さらに、イタリアの知識人の多くはフランス語もよくしたから、コミュニケーションの障害もなく、サルトルは活発に彼らと議論を交わすことができた。そのなかでまず取り上げるべきは、エリオ・ヴィットリーニである。

### エリオ・ヴィットリーニ Elio Vittorini (1908–1966)

シチリアのシラクーザに生まれ、ヴェネチア地方で労働者として生活しながら文学修行に専念したヴィットリーニは、1931年、短篇集『小市民 *Piccola borghesia*』によって、イタリア青年作家の指導者的存在となった人

物である。当時いまだ非合法組織であった共産党に入党、1943年には逮捕され投獄されるも、釈放後は再びファシスト政権に対するレジスタンス組織に参加。ファシズム批判をきわめて象徴的な形で記した『シチリアでの会話 *Conversazione in Sicilia*』(1941)は版を重ね、レジスタンスの精神的基盤となったとされる<sup>5)</sup>。

サルトルのヴィットリーニへの共感は、二人に共通するアメリカ文学への共感とも重なっているだろう。ヴィットリーニは1933年にロレンスの翻訳を開始して以来、ポー、サローヤン、フォークナー、スタインベックなどを次々と翻訳紹介したが、自由な創作に制限があった30、40年代のイタリアの文化にアメリカ文学は大きな影響をもたらし、ネオ・リアリズムを準備した。それと同時に、二人に共通しているのは、戦後すぐに雑誌というメディアを通して、新たな文化状況を構築しようという姿勢である。ヴィットリーニとの交流について、ボーヴォワールは次のように伝えている。

私たちをミラノで迎えたのは、ヴィットリーニが主幹をしている『ポリテクニコ』誌のスタッフだった。われわれの雑誌はたがいにひじょうによく似ていた。両誌とも創刊号はほぼ同じ時期に出た。『ポリテクニコ』は初め週刊、のちに月刊になった雑誌で、参加の文学に関するサルトルのマニフェストを載せたこともある。私たちは、ヴィットリーニとはすでにパリで会っていた。私は『シチリアでの会話』の仏訳も読んでいた。[略] 私たちはイタリアでは左翼の人びとが共同戦線を形成していることを理解した。私たちは夜おそくまで喋った。ヴィットリーニは最近イタリアの коммуニストたちが直面した困難について語った。(FC137/上106)

『ポリテクニコ *Politecnico*』誌は、もともとレジスタンス期に、共産党に近い若き知識人エウジェニオ・クリエル Eugenio Curiel (1912-45) によって構想されたが、彼が死去したためにヴィットリーニが後を受け継いだと言われる<sup>6)</sup>。創刊は1945年、ボーヴォワールも述べるとおり、当初は週刊誌として売店や共産党の支部で販売されていたが、46年5月からは定期購読の月刊誌に変更。知識人だけでなく、一般大衆に向けられたオピニオン誌を目指し、47年12月までヴィットリーニが主宰した<sup>7)</sup>。雑誌設立の趣旨は、イデオロギーの対立を越え、搾取と隷属から脱出するための新たな文化を目指すことであり、この目的を達成するため、1) 前衛的

なグラフィック、2) 現状の具体的な問題の調査、3) ヨーロッパおよびアメリカの最新芸術文化（実存主義、精神分析、前衛芸術など）の紹介という路線を戦略的に選んだ。しかしながら、この方針はすぐさま政治的次元でも文化政策においてもイタリア共産党の考えと対立し、ルポリーニやアリカータ（後出）によって手厳しく批判された。というのも、当時の共産党は、革新的芸術や文化を警戒する保守的な中流層を取り込むことを考えていたからである（後に詳しく見るように、サルトルはイタリア共産党の柔軟なポジショニングを高く評価していたが、実際には知識人と党の間には確執があったのだ）。共産党の指導者トリアッティ（後出）は、『ポリテクニコ』の路線を、きわめてブルジョワ的な文化観であり、有害だとして激しく非難した。それに対して、ヴィットリーニはあくまで政治に対する文化の優位を主張し、知識人は政治家に追随すべきではないという立場を貫き、最終的には共産党と訣別、49年に共産党を離党することになる。このようなヴィットリーニのスタンスはサルトルと共通するものと言える。

サルトルとの出会いは46年春のヴィットリーニのパリ訪問のときだと言う。彼は45年にすでに、パリを訪れ、全国作家委員会（Comité national des écrivains）<sup>8)</sup>で、アラゴンをはじめとする共産主義作家たちの面々と会談したが、その堅苦しい雰囲気には辟易したらしい。それに対して、サルトルとの関係は、すぐさま具体的な共同作業に発展する。まず『ポリテクニコ』16号が、TM誌「創刊の辞」の翻訳を掲載。46年7-8月号には、フランコ・フォルティーニによるサルトルとボーヴォワールへのインタビューも掲載される<sup>9)</sup>。

一方、サルトルのほうでも47年にTM誌で、ヴィットリーニの同年刊行の小説『センピオーネ・トンネルがフレジュス・トンネルに目配せする *Sempione strizza l'occhio al Frejus*』の抜粋の翻訳を掲載する（18, 19号）。さらにTM誌は200頁に及ぶ「イタリア特集号」（8-9月、23・24合併号）を組んだが、その編集にあたっては人選をはじめヴィットリーニの手助けが大きく関与している。当初、サルトルはイタリア共産党の影響下にあったフィレンツェの雑誌『社会 *Società*』と協力しようと思ったが、意見の一致を見なかったようだ。

だが、蜜月は長くは続かなかった。次第にマルクス主義に近づくサルトルと、そこから遠ざかるヴィットリーニの道は離れていった。その関係を次の世代に属すイタリアを代表する作家イタロ・カルヴィーノは1967年

に次のように分析している。

サルトルが体現している「哲学的なるもの」の優先（これは「文学的なるもの」に、「科学的なるもの」に、「政治的なるもの」自体に、要するに世界を直接的に読みとるあらゆる方法に優先する）は、つねに、ヴィットリーニ自身が考える立場とは反対の与件である。さらに、実存主義の「本来性 *autenticità*」はヴィットリーニのそれではないとつけ加えることができよう。なぜなら、ヴィットリーニの本来性は、自らを外在化するために新しい名前を見出すことに向かうが、実存主義のそれは、無意識の動機を、古典的になった体系（精神分析、マルクス主義）の名称によって分類することに向かうからだ。ヴィットリーニはこれらを否定はしないが、事物が外部からはねかえってくることを望んでいる<sup>10)</sup>。

とはいえ、ヴィットリーニはサルトルの提唱したアンガージュマンという考えを単純に否定したわけではないことは、次の発言からも窺える。

今日では、誰もがジャン＝ポール・サルトルによって広められたようなアンガージュマンの優柔不断な概念を拒む。しかし、作品はつねに客観的にアンガージュしている、つまり、政治的な意味をもち、作家の意志から独立した形でそれ自身の機能を持っているのだ<sup>11)</sup>。

いずれにせよ、1960年秋、ヴィットリーニが、ブランショ、ディオニス・マスコロ、ルイ・ルネ＝デ・フォレらと共に、「国際雑誌 *Revue internationale*」の刊行を計画した際には、サルトルにも相談を持ちかけている<sup>12)</sup>。この雑誌は結局頓挫してしまうのだが、文字通りの国際雑誌を目指し、フランス、ドイツ、イタリアで同時出版を計画していた。このように、ヴィットリーニとフランス知識人の交流は、サルトルとボーヴォワールやTM誌の関係者にとどまっていたわけではないが<sup>13)</sup>、戦後すぐになされた協力関係の重要性は強調してもしすぎることはなからう。

### カルロ・レーヴィ Carlo Levi (1902-1975)

ユダヤ系の画家、作家、活動家、反ファシスト、医師でもあったカルロ・レーヴィは、日本での知名度こそさほど高いとは言えないが、サルトルにとっても、また戦後のイタリア文化においても極めて重要な人物である<sup>14)</sup>。

レーヴィはもともと医者であり、30年代にはパリで医学の専門研究を続けていたが、その一方で画業への気持ちも捨てがたく、パリ滞在初期には、プロコフィエフ、ストラヴィンスキー、モラヴィア、キリコなどとも交流していた多才な人物である。政治的には、1924年から30年までは、当事国外に亡命していたイタリア共産党の指導者のひとりであり、最高責任者にまでなったものの、1931年に党から追放された。その後は行動党 (Partito d'Azione) に加わり活動进行。

サルトルは、1945年に刊行された彼の代表作『キリストはエボリで止まった *Cristo si è fermato a Eboli*』の抄訳を、「イタリア特集号」に先立つ46年にTM誌に掲載した<sup>15)</sup>。これは、ムッソリーニのファシズム政権下で、レーヴィがルカーニア地方へと流刑に処せられた時の回想録であり、1979年にはフランチェスコ・ロージ監督によって映画化もされた。貧苦に苦しむイタリア南部でも最貧、最後進地域のひとつである地方の、僻村の小農たちの苦難の日々を、レーヴィが透徹した筆致で描いたことによって、「南部問題」が国民的議論にまで発展させられたとされる問題作である。

サルトルとボーヴォワールがレーヴィに最初にあったのは、ローマのフランス大使館で彼らのために開かれた歓迎パーティーでのことだった。すでにその作品に触れていたこともあり、その人柄に好感を持ったとボーヴォワールは伝えている。

〔行動党は〕主として知識人からなる小さなグループで一般大衆との接触はなかった。数ヶ月前に、その中のリベラルな一派と、レーヴィが属している共産党にごく近い革命的な一派との間に分裂が起こった。私たちの立場はレーヴィのそれと近かった。彼は書くものと同じくらい魅力のある話し方をした。あらゆることに注意を向け、あらゆることをおもしろがる。彼の飽くことを知らぬ好奇心はジャコモッティを思い出させた。死ぬことさえも彼には興味深い経験に思われるのだった。彼は人間や事物を説明するのに、決して一般的な概念は使わず、イタリア風に、つまり短い逸話を選んで語るのだった。

(FC141-142／上109)

TM誌の「イタリア特集号」にも、レーヴィの短篇「血」が掲載されているが、それだけでなく、彼と同じ行動党のメンバーであるマンリオ・ロッシ＝ドーリア Manlio Rossi-Doria (1905-88) やアルド・ガローシ Aldo Garosci (1907-2000) などの原稿を集めたのもレーヴィだったようだ<sup>16)</sup>。

サルトルとレーヴィはその後、1948年12月にRDR（革命民主連合）のプレイル・ホールにおける集会<sup>17)</sup>をはじめ、数多くの国際会議で顔を合わせることになる。スタンダールが、両者が共通に愛する作家であったことに顕著に現れているように文学においても、政治においても共通点は多かった。

だが、なによりも重要なのは、『アルプマルル女王』のローマの部分にレーヴィが登場することだろう。現存しているテキストでローマの部分はきわめて少なく、プレイヤード版で24ページほど、その他に3ページほどのメモが残っているだけだが、そこで重要な役割を果たすのが、カルロ・レーヴィ宅を訪れる場面である（MAEA 743-756）。プレイヤード版では、レーヴィと明記されているわけではなく、Lとイニシャルだけが記されているだけだが、同じ落書きのエピソードがボーヴォワールの回想にもほぼ同じ形で記されているので、レーヴィ宅であることは明らかだ<sup>18)</sup>。

レーヴィは、ローマのパンテオンからほど近いジェズ広場に面したアルティエリ邸（Palazzo Altieri）の最上階に住んでいた〔図版2, 3〕。この17世紀に建てられた壮大なパラッツィオは、女優のアンナ・マニャーニ



〔図版2〕 アルティエリ邸 Palazzo Altieri

手前右にわずかに見えるのが、かつてはイエズス会の本拠地だったジェズ教会。





【図版3】アルティエーリ邸内部

や、舞踏家グイード・ラウリが住んだこともあり、一時は日本大使館でもあった由緒ある建物だ。馬でそのまま上の階にいけるように巨大な階段があることや、レーヴィと家主の辛辣なやりとりが廊下の壁に書かれている挿話など、きわめてロマネスクな場面であり、詳細な分析を要するが、これについては『アルプマルル女王』を検討する際に詳しく見ることで、ここでは割愛する。

1967年、サルトルはイタリアの美術雑誌『ガッレリア』のレーヴィ特集号に「普遍独自」と題する短いテキストを発表する<sup>19)</sup>。このテキストの冒頭でサルトルはとりわけレーヴィの人柄を褒め称えつつ、それをローマと関連づけている。

カルロ・レーヴィと、モスクワ、ニューヨーク、パリで会うとき、奇妙な矛盾が現れる。彼は、どこにしようともローマ人のなかのローマ人であり続け、まるでローマから離れはしなかったかのような、あるいはローマを携えてきたかのような印象をもってしまうほどだ。



だが、とりわけ重要なのは、その先でサルトルがこのローマ性、イタリア性という「独自性」が、そのまま「普遍的」なものに通じるという指摘をすることである。サルトルの晩年の重要なテーマである「独自普遍 universel singulier」という考えは、レーヴィをはじめとするイタリアの知識人たちとの交流を通して育まれたことを、このエッセーは端的に示しているように思われる。個人の資質とその環境が、作家によって内面化され、それが行動や表現によって再外在化されていくさまを、サルトルはティントレット論において描くのだが、そのような発想そのものが、イタリア滞在と密接に結びついているのではなかろうか。

### アルベルト・モラヴィア Alberto Moravia (1907-1990)

日本でも有名なモラヴィアに関してはあらためてその経歴を紹介するまでもないだろう。1929年に自費出版した『無関心な人びと *Gli indifferenti*』は、イタリアの読書界に大きな反響を呼び、フランスでも31年に翻訳が出版された。この小説は、取り上げたテーマや手法によって、実存主義を予告する作品だと言える。実際、サルトルはモラヴィアを高く評価し、『無関心な人びと』のうちに、無関心、異邦性、極度な明晰性などの『嘔吐』のテーマとの共通点を見出している。

第二次世界大戦中は、ムッソリーニ政権から新聞への執筆を禁じられるなどの弾圧を受け、Pseudo という偽名で執筆を続けたが、戦後は旺盛な活動を再開、恋愛をはじめとする人間関係の襞を描く小説を多数発表した。ゴダールによって映画化された『軽蔑 *Il disprezzo*』(1954)はよく知られている。

モラヴィアは、サルトルの印象を後年のインタビューで次のように皮肉たっぷりに述べている。

[サルトルとは] とても親しくなった。彼がローマにやってくるごとに会うようになった。異常なくらい気まぐれで、知的貪欲さもすごいものだった。背が低くて、眼鏡の内側にやぶにらみの目が光っていた。水族館の魚で、不意に思い出したように動いては、眼の前にあらわれたものをなんでも食べてしまう奴がいるだろう、まるでああいう魚のようだった。私が生涯を通じて識り合った知識人の中で、おそらく最も覇気に満ちた人物だったろうね<sup>20)</sup>。

サルトルがモラヴィアと出会ったのは46年の最初のローマ滞在の際だ

ったようだ。(FC143/上111)。当時のモラヴィアはイタリア共産党には属しておらず、文学と政治を区別しており、サルトルのアンガージュマンとしての文学という考えには否定的であった。その彼が、1984年にはイタリア共産党から欧州議会選に立候補して当選するが、そういった政治活動はサルトルの死後のことに属す。

TM誌には、「涙の大洪水」、「豚小屋の9ヶ月」などが掲載されたほか、書評もしばしば掲載されている<sup>21)</sup>。一方のモラヴィアも、『嘔吐』や「一指導者の少年時代」に対する賛辞を惜しまなかった。完成にはいたらなかったものの『出口なし』の映画化のための脚本にも携わった。この件については、アニー・コーエン＝ソラルは、作家本人にインタビューで事情を聞き出している。

『出口なし』を映画化する脚色の仕事をするようになっていたのですが、サルトルは私の示した解釈をまったく認めなかったのです。もっともその点は、彼のほうが正しかったのですが。(S 419/下678)

サルトルの死に際して、モラヴィアは、「運動する〈現実〉」と「希望の社会のうちで<sup>22)</sup>」という二つの文を草し、追悼の意を表している。

### イニャツィオ・シローネ Ignazio Silone (1900-1978)

山岳地帯アブルッツォ州はペシーナの小さな土地所有農家に生まれ、孤児として育ち、後にグラムシやトリアッティらとともにイタリア共産党の結成に関わったシローネについても触れる必要があるだろう。世界的なベストセラーとなり、フランス語にもすぐ訳された小説『フォンタマラー Fontamara』(1933)や『パンと葡萄酒 *Pane e vino*』(1937)<sup>23)</sup>はもちろんのことだが、辛辣にして抱腹絶倒のアイロニーにみちた『独裁者の学校 *La scuola dei dittatori*』(1938)<sup>24)</sup>などの豊かな文学作品は早くからフランスでも知られていた。彼は、スターリニズム批判のために1931年にイタリア共産党から除名された過去を持つが、戦後は、亡命先のスイスでイタリア社会党の再建に尽力、機関誌『アヴァンティ!』の編集長も務めた。だが、1951年、政党間の駆け引きに失望し、政治の世界からは身を引き、文化活動に専心、「文化の自由のための国際運動」、「東西作家会議」の発起人、ペンクラブ会長などを歴任する。

「いくつかのフランスのレジスタンス文学に比べ、シローネの小説は、



【図版4】デ・シカ監督の『アルトナの幽閉者』のポスターは、主演女優のソフィア・ローレンがメイン。

政治と人間という、この類の終戦後の小説の在来の方程式に、風土と宗教の問題を織り入れることによって、それまでになかった重厚さと現実性を与え、全体的な人間ということについて深く考えさせてくれた<sup>25)</sup>と、この作家の本質を突くコメントをしたのは、「全体的な人間」のモチーフに魅せられてイタリア語を学びはじめたという須賀敦子である。「全体的人間」はまさにサルトルのキーワードでもあった。

シローネに関してボーヴォワールは、「レーヴィほどのびのびした感じではなく、もっと閉鎖的なシローネ——私はかつて彼の『フォンタマラ』を、最近では『パンと葡萄酒』を愛読したが——もまた話し上手だった。アブルッツォ地方の山間で育った彼の幼年時代や、その村の遅しい農民たちの話は味わい深いものだった」と評している (FC142-143/上 110)。

以上、見てきたように、サルトルは当時のイタリアの重要作家たちとの

深い交流があったが、そのほかに、映画監督では、1962年に戯曲『アルトナの幽閉者』[図版4]を翻案して映画化するヴィットリオ・デ・シーカ Vittorio De Sica (1901-74) (言わずと知れたネオ・リアリズムの巨匠)や『アルジェの戦い』のジッロ・ポンテコルヴォ Gillo Pontecorvo (1919-2006)とも親交があった。

また、画家としては、シチリア島のパゲリア出身で政治家でもあったグットゥーゾとの交流が長く続いている。レナート・グットゥーゾ **Renato Guttuso** (1911-1987) は、1940年に非合法の共産党に入党し、反ファシスト抵抗運動に参加する<sup>26)</sup>。戦後は、「新芸術戦線 (Fronte nuovo delle arti)」の指導的画家として、芸術の社会的役割を強調し、イタリア共産党の旗のデザインも行っている。ヴィスコンティの芝居『第五列』の舞台装置なども手がけたグットゥーゾは、デ・シーカによる『アルトナの幽閉者』の映画化でも舞台装置を担当している。ポーヴォワールの回想録にもしばしば登場する。最初の出会ひのくだりを引いておこう。

コミュニストの画家グットゥーゾはマルグッタ街の彼のアトリエに、ある晩、私たちを招いてくれた。露台が幾重にも重なり、奥深い中庭、階段、屋上橋などのあるこの通りには、主として画家や作家たちが住んでおり、ローマのレジスタンス運動のあいだは文字通り抵抗<sup>マキ</sup>の地になっていた。

(FC144/上112)

1961年のサルトルのローマで講演会の討議でも発言しているだけでなく、その後もローマでしばしば会食をする仲であった。

作家・芸術家との交流についての節を終えるにあたって、サルトルとポーヴォワールをイタリアの知識人たちと繋いだフランス人、ジャンヌ・ブイスヌーズ Jeanine Bouissounouse (1903-1977) の名前もあげておこう。作家・ジャーナリストだった彼女は1945年から47年9月までローマで暮らしていた。それは、夫であった海軍将校、レジスタンスの闘士でもあったルイ・ド・ヴィルフォス Louis de Villefosse (1900-1984) が、イタリアとの休戦条約の施行を監督する任務を帯びた連合国委員会のフランス代表であったためである。フランス共産党の同伴者であったブイスヌーズは、イタリアの左翼系の知識人や政治家を一同に招いたパーティーを催し、サルトルを彼らに紹介した。TM誌の「イタリア特集号」では、「ロ

ーマの民 Il Popolo di Roma』というテキストを寄せている。

## 2.2 思想家、政治家

次に思想家や政治家を見ることにしよう。サルトルと、イタリアの思想家、とりわけマルクス主義者との関係を検討するためには、1961年と64年に行った二回のローマ講演<sup>27)</sup>とその背景を確認するのがよいだろう。というのも、彼らの大半が、この講演と関係していたからだ<sup>28)</sup>。

サルトルは1960年に『弁証法的理性批判 *Critique de la raison dialectique*』(以下『批判』と略記)を出版したが、フランスでの反応は冷ややかなものだった。この後期サルトルの主著は、57年に発表された『方法の問題 *Question de méthode*』を緒論としており、実存主義とマルクス主義が補完的なありかたで両立することが主張されている。この立場を出発点として、科学的であると標榜する弁証法的唯物論に対して、主体的な史的唯物論が提唱され、個人的実践と共同の実践である歴史—社会的次元の問題が考察される『批判』は、フランス共産党や社会党、広く左翼一般との間で議論を巻き起こしてしかるべき著作であった。だが、現実にはそうならなかった。というのも、1956年にソ連がハンガリーに軍事介入したことをきっかけに、サルトルは52年以来担ってきた共産党の「同伴者」の役割を放棄し、フランス共産党とは訣別状態にあったからである。

一方、イタリア共産党との関係は悪くはなかった。50年代半ば以降、サルトルはフランスやソ連の共産党に完全に幻滅したが、イタリア人たちの人間味溢れる共産主義への共感が消えることなく、イタリアの共産党はその後も別格扱いだった。サルトルはフランス共産党とイタリア共産党を比較して、後者を評価する態度をしばしば表明している<sup>29)</sup>。さらに言えば、戦後すぐの段階から、サルトルはフランス共産党とは折り合いが悪かったのであり、46年イタリア滞在のときに、ボーヴォワールとサルトルは、イタリア人の暖かさに強い感動を受けて以来、友好関係は途切れることなく続いていたのだ。ボーヴォワールは次のように記している。

当時〔46年〕私たちは仏・伊両国の共産党のあいだに認められる相違を十分に理解していなかった。それでもフランスの連中の敵意を寂しく思っていた私たちは、イタリアの人たちの友情に喜んで甘えたり、その喜びは16年後の現在まで、一度として欺かれなかったのである。(FC148／上114)

実際、イタリア共産党は、文化や知的活動に対して、フランス共産党に比べるとより柔軟な姿勢をもち、サルトルの著作にも、つねに強い関心を持ち続けてきた。『主体性とは何か』の編者ミシェル・カイルとラウル・キルシュメールの序文がそのあたりの事情を適切に説明している。

政治学者マルク・ラザールが強調する事実によれば、フランス共産党が知識人にせいぜい専門家としての役割しか与えなかったのにたいして、イタリア共産党は知識人が政策の決定に介入することに積極的だった。「たとえば冷戦期のように、党指導部と知識人とのあいだで一時的な相克があったとはいえ、学者たちの思索、とりわけグラムシ研究所の枠内で展開された思索は、党の政策の立案に貢献した。党指導部の近くにいたこれらの知識人（多くの場合、哲学者や歴史家）の存在によって、党の中枢において理論的討議や文化的討議が活発に行われた。」とりわけ、ローマのグラムシ研究所は、「党指導部にとってはまさに思考実験室」の役割を果たしたのである<sup>30)</sup>。

グラムシ研究所は、この哲学者の遺稿や関係資料を管理する機関として1950年に創設されが、各種のシンポジウムなども開催していた。1961年12月12日、「主体性の問題 *Il problema della soggettività*」と題されたシンポジウムがグラムシ研究所と「アウト・アウト *Aut aut*」, 「社会 *Società*」, 「批評思想 *Il pensiero critico*」の三雑誌の共同で開催された。主体性とマルクス主義との関係を問う内容で、エンツォ・パーチ、サルトル、チューザレ・ルポリーニの三人による講演の後<sup>31)</sup>、二日にわたって討論が行われた<sup>32)</sup>。

さらに、その3年後の64年5月にサルトルは、ふたたびローマのグラムシ研究所の招きで、「倫理と社会」と題する講演をおこなう。62年から準備していたこの講演で、彼は社会主義のための倫理学を素描しているが、この構想には、イタリアの哲学者たちとの交流が大きな役割を果たしていると考えられる。

だが、ここでは、サルトルの講演会の内容自体には立ち入らず、61年の討議の際の共産党系知識人の反応を素描するに留めよう。現存する資料では、数学者ロンバルド・ラディーチェによる自然弁証法、客観弁証法、主観主義などに関する指摘に対するサルトルの返答から始まる。その後、話は弁証法の位置づけ、セメラリーによる『弁証法的理性批判』の意図の確認、ピオヴェーネが提起する芸術と主体性の関係というきわめて興味深

い問題構成へと移動していく。後の『家の馬鹿息子』で分析されるフロアベールと現実との関係など、サルトル晩年の思想に通じる主題が素描されているだけでなく、美学、言語学、精神分析の問題などにも触れられており、『文学とは何か』以降のサルトルの文学・言語観を知る上できわめて重要な資料となっている。なかでも、「独自＝普遍」というサルトル最後の重要な概念を理解するために例示されているセルバンテスなどのくぐりはきわめて適切かつわかりやすいものであり、さらには芸術と倫理の関係も素描されている点でも、後期サルトルの文学・倫理思想を論じる際には、参照すべきものとなっている。討議は最終的には、客観性と主体性の関係に戻って閉じられているが、この討論会の記録を読むと、参加者たちが以前から親しく付き合い、立場に隔たりこそあるものの、相手への深い理解があり、きわめて和やかな雰囲気の中で討議が進んでいく様子が見てとれる。

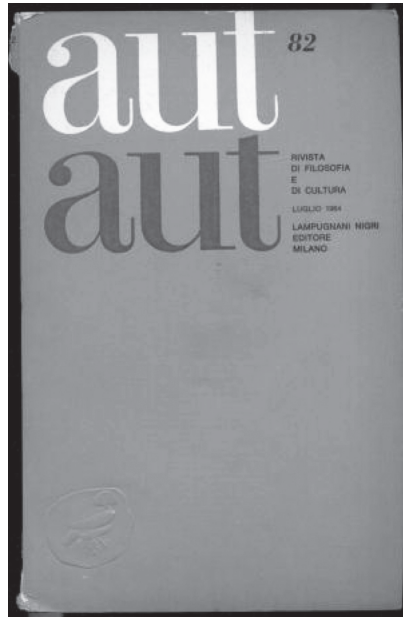
以下、そのなかで重要な人物について順次概観していこう。公刊された討論会記録での発言数こそけっして多くはないが、サルトルとの関係で最も重要なのは、エンツォ・パーチであろう。

### エンツォ・パーチ Enzo Paci (1911–1976)

プラトン研究を出発点とするパーチはミラノ大学教授で、同時代の哲学者たちにも目配りしつつ、自らの思想を探究した哲学者である。39年にはすでに『存在の哲学の諸原理 *Principii di una filosofia dell'essere*』を発表したが、第二次世界大戦が勃発すると将校として従軍中にギリシャで捕まり<sup>33)</sup>、1940年にドイツ軍の捕虜となり、ドイツのヴィッツェンドルフ収容所に送られ、捕虜収容所生活を送る。そこで知り合ったポール・リクール<sup>34)</sup>と、フッサールの『イデーン』と一緒に読み、その後も親交をもった。

1951年に、文化・思想を扱う季刊誌『アウト・アウト *Aut aut*』を創刊、76年まで編集主幹を務める。雑誌名がキルケゴールの『あれか これか』に由来するものであることから明らかなように、サルトルと同様、現象学と実存思想を出発点とするパーチは、関係性を重視するとともに、不条理の乗り越えを図ろうとする、独自の関係主義的現象学を提唱した。『フッサールの現象学における時間と真理 *Tempo e verità nella fenomenologia di Husserl*』(1961)でパーチは、ハイデガーやレヴィナスなども参照しながら、フッサールのエポケー概念を自己内省の重要なあり方としている。そ





【図版5】『アウト・アウト』82号

の一方で、サルトルにも継続的に関心を示しており、1953年刊行のロニョーニとの共著『表現主義と実存主義』<sup>35)</sup>の実存主義の項目でもサルトルを論じている。

1961年に刊行した『現象学日記』<sup>36)</sup>には、サルトルへの少なからぬ言及がある。60年10月14日に、その年の読書をサルトルの『弁証法的理性批判』とフッサールの『危機 [ヨーロッパ的諸科学の危機と超越論的現象学]』に当てると記しているほか、61年4月11日には、「ここ、ミラノでサルトルと一緒にいるのはほんとうに嬉しい。友人たちと一緒に朝食を取った」といった記述も見られる。したがって、パーチは万全の体勢で、この討論会に臨んだのだと言える。だが、そのような具体的な交流以上に、現象学とマルクシズムを近づけようと試みたパーチと、サルトル思想の親近性に着目すべきであろう。その意味で、興味深いのはサルトル思想とフッサール思想のそれぞれの検討をパーチが同時進行で行っていることだ。エンリコ・フィリッピーニによるイタリア語訳が1961年に刊行された『危機』に、パーチは序文を寄せたのみならず、その注解として『諸

科学の機能と人間の意義 *Funzione delle scienze e significato dell'uomo*』を63年に刊行するのである。

ローマ講演を挟んで『アウト・アウト』誌は、1959年の51号、62年の67号、64年7月の82号と三回にわたって「サルトル特集」を組む[図版5]。パーチは51号には「サルトルと私たち」<sup>37)</sup>、1962年には「最近のサルトルと主観性の問題」<sup>38)</sup>、64年にはサルトルの自伝『言葉』に触れるかたちで「言葉 *Le Parole*」<sup>39)</sup>を発表している。のみならず、73年にもあらためて特集号を組み、サルトルの講演も併せて再録している<sup>40)</sup>。これらの論文の内容をサルトルもしっかりと追っていたことはボーヴォワールの回想録から伺える<sup>41)</sup>。

72年に刊行された『現象学日記』の再版に新たに附された序文でパーチは、日記というのは、危機を生き、弁証法の方向性を探究する個人的なやり方であると述べたうえで、それは共同体の批判であると同時に、サルトルがフローベールに関して行ったように各個人の批判でもある、と述べて、自らの思索とサルトルのそれに関連づけていることから窺えるように、二人の対話は両者の思想に組み込まれたと言える。

もう一人の講演者であるチェーザレ・ルポリーニ *Cesare Luporini* (1909-1993) は、カリアリ、ピサ、フィレンツェで哲学史を講じた哲学者、文芸批評家で政治家。ドイツ留学中にハイデガーの講義を聴講し、実存主義に向かった後、マルクス主義に同調し、1943年イタリア共産党に入党。1958年から63年まで上院議員に選出されている。歴史主義批判に基づく彼のマルクス主義は、経済至上主義的な教条主義を拒否するとともに、マルクスにおける人間主義を評価するという点で、サルトルと共通点を持つ。ルポリーニは、講演ではマルクス主義における主体性の重要性について、サルトルと意見が一致していることを述べている。主著に『弁証法と唯物論 *Dialectico e materialismo*』(1974)。ルポリーニは、1964年、イタリア共産党の雑誌『クリティカ・マルクシスタ』4月号に、「サルトルと коммуニスト *Sartre e i comunisti*」と題する論文を掲載し、あらためてサルトルとマルクス主義との関係を確認するほか、死に際しては追悼文を書いていることを付言しておこう<sup>42)</sup>。

ジュゼッペ・セメラリー *Giuseppe Semerari* (1922-1996) はバーリ大学の哲学教授、フッサールからルカーチまで現代哲学を幅広くカヴァーする哲学者で、哲学批評雑誌『パラディグマ』の編集長でもある。『関係としての哲学 *La filosofia come relazione*』(1961)ほか多数の著作があるが、サ

ルトルとの関係では、ヴィート・カロフィリオとの共編で『ジャン＝ポール・サルトル、理論、著作、活動』<sup>43)</sup>の著作がある他、メルロ＝ポンティとサルトルにおける弁証法の概念について『シェリングからメルロ＝ポンティまで』でも言及している。

グイード・ピオヴェーネ **Guido Piovene** (1907-1974) は、作家で、『コリエーレ・デラ・セーラ』紙や『ラ・スタンプ』紙で活躍したジャーナリスト。戦中に発表した『女性修練者からの手紙 *Lettere di una novizia*』(1941) はすでに44年にフランス語に翻訳されたし、『イタリア旅行 *Viaggio in Italia*』(1956) や、ストレーガ賞を授賞した『冷たい星 *Le stelle fredde*』(1970) で知られる<sup>44)</sup>。TM誌の「イタリア特集号」には「カトリック教会とファシズム」が掲載されている。

だが、さらに重要なのはマリオ・アリカータ **Mario Alicata** (1918-1966) だろう。アリカータは、1940年入党の、イタリア共産党生え抜きの重鎮の一人で、学位論文「ヴィンチェンツォ・グラヴィーナと18世紀初頭の美学 *Vincenzo Gravina e l'estetica del primo Settecento*」以来一貫して、芸術と政治の関係について考察を続けた点で、サルトルとの接点が見られる。ローマで反ファシズムのレジスタンス運動に参加する一方で、文芸批評のジャーナリストとして活動<sup>45)</sup>。50年代半ばから党の文化政策の中心人物として、指導者の観点からも、文化問題に大きな関心を寄せ、61年のサルトルのローマ講演の際に討論会の司会を務めたのも彼であった。62年からは、党の機関紙『ウニタ *L'Unità*』の主幹も務めた。ヴェネチア映画祭で金の獅子賞を受賞したタルコフスキーの映画『ぼくの村は戦場だった<sup>46)</sup>』について、『ウニタ』紙をはじめとするイタリア左翼からブルジョワ的だと批判があったとき、サルトルが反論を寄せたのも『ウニタ』紙だった<sup>47)</sup>。その冒頭は、サルトルがイタリアの左翼に託していた思いが、きわめて明確に現れている。

#### 親愛なるアリカータ

きみの新聞の寄稿者のなかでも、文学、造形美術、映画欄を担当している人びとに、ぼくが心から尊敬の念をいだいていることは何度も繰り返して語ってきた。思うに、彼らにおいては厳正な態度と自由な精神とが共存し、そのため大体において、問題の核心を突き、同時に、作品を独自 (*singulier*) かつ具体的な姿で把握できるのだ。『パエーゼ』紙や『パエーゼ・セーラ』紙にも同

様の賛辞を呈することができる。左翼にありがちな図式がなく、図式を弄する人もまったくいないからだ。

だからこそ、いまぼくはきみたちに遺憾の意を表したい。ぼくの知る限りこれは初めてだが、『ウニタ』紙その他の左翼系新聞が『ぼくの村は戦場だった』について論じた文章に対して、なぜ図式的だという批難が向けられうることになってしまったのだろうか<sup>48)</sup>。

そう、サルトルはここでも、空疎な普遍主義ではなく、独自で具体的なものに眼を向けるイタリア的精神を称賛しているのだ。アリカータは、1964年に、サルトルの政治論集を本国フランスに先がけて、自ら序文を附して、『哲学者と政治』<sup>49)</sup>と題して刊行した。その序文でも、アリカータは、マルクス主義と実存主義の率直な討論を示唆しているように、立場の違いはあっても対話は続くのである。なお、彼がカルロ・レーヴィの『キリストはエボリで止まった』に対してきわめて否定的な見解を発表したことも付言しておこう。この作品を「芸術的には疑いもなくきわめてオリジナルなものとする一方で、「一連の理論の一貫性を欠いたテーゼ」が表明されていると批判したのであった<sup>50)</sup>。このような見解には、いかにも党のスポークスマン的な教条主義がかいま見えるようにも思われる。

討議の中で、サルトルと詩についてかなり突っ込んだやりとりをするのは、ガルヴァノ・デラ・ヴォルペ **Galvano Della Volpe** (1895-1968) である。マルクス主義の哲学者、とりわけ厳密な意味での唯物論的な美学理論を展開する。主著は『美的感覚批判 *Critica del gusto*』(1960)。その理論は、美的判断の形成における芸術作品の制作の社会的過程を強調し、また、芸術的創作の合理的価値を強調する。討議では、ルボリーニが、デラ・ヴォルペとサルトルの考えに大きな差がないと述べる点が興味深い。

もちろん、サルトルとボーヴォワールは共産党員だけでなく、非主流派のコミュニストともつきあいがあった。『イル・マニフェスト II *Manifesto*』紙の創設者のひとりで共産党から除名されたロッサーナ・ロッサンダ Rossana Rossanda (1924-) や政治家のレリオ・バッソ Lelio Basso (1903-1978) らとも交際があったことが、ボーヴォワールの回想録からは窺える<sup>51)</sup>。このように多くのコミュニストたちとの交流があったわけだが、その中で最大の人物は、言うまでもなく、イタリア共産党の指導者パルミーロ・トリアッティその人である。

## パルミーロ・トリアッティ Palmiro Togliatti (1893-1964)

トリノ大学時代以来のグラムシの友人であり、第一次大戦後には、グラムシとともに社会主義文化週刊紙『オルディネ・ヌオーヴォ Ordine Nuovo (新しい秩序)』を発刊した筋金入りの活動家だったトリアッティは、グラムシがムッソリーニのファシスト政権によって投獄された後、イタリアの左翼運動の中心となった人物だ。1930年代には亡命を余儀なくされたが、第二次世界大戦でイタリアが降伏した後は帰国、イタリア共産党をいわゆる「サレルノの転換」へと導き、政策をより右に移動させた。彼の指導するイタリア共産党は47年のコミンフォルムに参加したものの、その一方で、ソ連とは一線を画した柔軟路線を歩み、キリスト教民主党的支持基盤である教会組織に対抗できる民間組織の育成に努めた。こうして、トリアッティのリーダーシップの下で、イタリア共産党はイタリアで最大の党となった。トリアッティは、戦後、グラムシの著作集（エイナウディ社）の刊行に尽力しただけでなく『アントニオ・グラムシ——その思想と生涯』<sup>52)</sup>の執筆など、きわめて堅固な思想的な基盤をもつ政治家だと言える。

トリアッティは、64年フルシチョフ失脚後のソ連を訪問した際に、保養地のヤルタで休暇中、8月21日に脳内出血で急死した。サルトルはトリアッティの死の知らせを受けると、すぐさま一文を草した。翌日にイタリア語に訳されて、イタリア共産党の機関紙『ウニタ』に発表された追悼文は二人の交流を余すところなく表している。

イタリア以外の地で、他国の共産党代表たちに混じって、イタリア共産党の責任者たちに出会った者には、あなたたちの党の独自性は一目瞭然でした。その独自性を人は愛していたのです。(S. IX 137/109)

その独自性をサルトルは、他の国の共産党員には見られない、「自由な発言、明晰な思考、自分自身に向けられた軽い皮肉」のうちに見ており、そのことが逆説的にも彼らの政治的信念なり忠誠の現れだとしている。そして、まさにそのような美德を体現している人物がトリアッティだというのだ。

二人の出会いは、サルトルによれば1954年の7月のこと。ローマの庶民地区トラステヴェレのレストラン（というかもっと気取らないトラットリア）で、アリカータやグットウーゾらと夕食をとったことを追悼文で

回想している (S. IX 138/110).

重要人物であるにも関わらず、警備の護衛をつけることもなく、ローマの下町を自由に歩く姿に強く共感しているが<sup>53)</sup>、その後も、二人はローマでしばしば食事をともにしたという。トリアッティに体现されるイタリア共産党のうちにサルトルが見出したのは、教条主義に陥ることなく、現状を分析し、総合的に把握し、対応すること、つまりここでも、具体的な現実という独自性を重んじた上で、普遍性を目指す精神だったと思われる。それを端的に示す一文を引いておこう。

グラムシとトリアッティからきたこの分析と総合の精神のために、イタリア共産党は単に労働者の党であるだけではなく、またインテリゲンチアの党でもありません。これはすべての党の中で、最も知的な党なのです。

(S. IX 150/120)

ルポリーニによれば、トリアッティは党員ではない知識人に関して、「真摯で、発展を志し、内面において耐え忍び、保守勢力に使えようなどと考えずに、真理の探求に苦闘している人に対して寛容」であることを、イタリア共産党第10大会で表明したという<sup>54)</sup>。追悼文のなかで注目すべきは、1956年のハンガリー動乱の際のイタリア共産党の反応へのサルトルの共感である。その年の11月ちょうどローマにいたサルトルは、毎日『ウニタ』紙を読み、イタリア共産党のメンバーたちと議論をしたことを回想しつつ、トリアッティをはじめ、彼らのうちにある対話の姿勢に共感している。判断し、批判し、決めつけるのではなく、共感し、対話すること、これこそが、サルトルがイタリアの友人たちのうちに見出し、影響を受けた美德であるように思われる。

最後に、サルトルのイタリアへの影響の一例として、一人の思想家について触れておくことにしよう。イタリア全土の精神病院を解体し、地域の精神保健センターへ全面転換を図ることを決めた精神保健法 (180号法、別名バザーリア法) を成立させたことで知られる、フランコ・バザーリア **Franco Basaglia** (1924-1980) である。彼の精神医学における基本的な考えは、モノ扱いされていた患者たちを、主体として捉え、人間として復権させることであったが、その出発点になっていたのがサルトルの思想だったという<sup>55)</sup>。さらには、支配的な権力への従属関係から専門技術者が独

立することを説いたその知識人論に関しても、サルトルから多くの影響を受けていることは間違いない。

バザーリアは長くサルトルに私淑しており、1963年ローマで行われたシンポジウム「精神医学と現代文化風土における精神の問題」では「苦悩と自己欺瞞——神経症の人間の条件」<sup>56)</sup>という、サルトル理論を基盤にした報告を行っているほどだった。だが、実際に出会ったのは68年7月23日のボローニア大学医学部をサルトルが訪れたときだという<sup>57)</sup>。ここで、その細かい影響関係を検討する余裕はないが、バザーリア法の出発点に、サルトルが考えていた主体性の問題があり、そしてその主体性の思想そのものがイタリアの知識人との交流を通して展開していたということは重要である。

[以下、続く]

\*

本稿は、「サルトルとイタリア (1)」(『立教大学フランス文学』45号、2016年3月25日、pp. 69-82)の続編である。

頻出する引用に関しては以下の略号を用いる。なお、翻訳については多少変更をほどこしたものもある。

サルトルの著作

S. IX : *Situations, IX*, Gallimard, 1972. / 「パルミーロ・トリアッティ」(鈴木道彦訳)『シチュアションIX』人文書院、1965.

MAEA : *Les Mots et autres écrits autobiographiques*, sous la direction de Jean-François Louette, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2010.

ボーヴォワールの著作

FC : *La Force des choses*, Gallimard, 1963, coll. « Folio », 1988. 『或る戦後』上・下 (朝吹登美子・二宮フサ訳)、紀伊國屋書店、1965年。

CA : *La cérémonie des adieux, suivi de Entretiens avec Jean-Paul Sartre* août-septembre 1974, Gallimard, 1981. ボーヴォワール『別れの儀式』(朝吹三吉・二宮フサ・海老坂武訳)人文書院、1983年。

その他

ES : Michel Contat & Michel Rybalka, *Les Ecrits de Sartre*, Gallimard, 1970.



S : Annie Cohen-Solal, *Sartre 1905-1980*, Gallimard, 1985. アニー・コーエン＝ソラル『サルトル伝 1905-1980』上・下巻 (石崎晴己訳) 藤原書店, 2015 年.

### 注

- 1) 戦後のフランスとイタリアの知識人の交流については以下を参照のこと。  
Olivier Forlin, « Intellectuels français et intellectuels italiens dans la transition du fascisme à la République (1945-1948) », *Laboratoire italien*, pp. 111-124, <http://journals.openedition.org/laboratoireitalien/648>
- 2) « Lettres d'Antonio Gramsci sur Benedetto Croce », *Les Temps Modernes*, n° 23-24, août-septembre 1947, pp. 252-261 ; G. Cantoni, « Antonio Gramsci », *ibid.*, pp. 237-251.
- 3) Jean Paul Sartre, *La nausea*, traduzione di Bruno Fonzi, Torino ; *ibid*, *Il muro*, Torino, G. Einaudi, 1947 ; *Immagine e coscienza : psicologia fenomenologica dell'immaginazione*, Torino, Einaudi, 1948. ちなみに哲学の主著『存在と無』が刊行されるのはずっと後の 1958 年で出版社も変わっている。Jean-Paul Sartre, *L'essere e il nulla*, Milano, A. Mondadori, 1958.
- 4) *Les Temps Modernes : numero speciale sugli Stati Uniti d'Americ*, edizione italiana a cura di Alberto Mondadori e Giancarlo Vigorelli, Milano, A. Mondadori, 1947.
- 5) 『シチリアでの会話』(鷺平京子訳) 岩波文庫, 2005. 後にストローブとユイレが「シチリア！」(1999)としてその一部を映画化したことでも知られる。その他に、『人間と人間にあらざるものと *Uomi e no*』(1945) (邦訳は脇功訳, 松籟社, 1981 年) など.
- 6) 以下の記述は, Massimiliano Borelli, « “Il Politecnico” di Vittorini » (Studio [https://www.oblique.it/images/formazione/dispense/vittorini\\_politecnico.pdf](https://www.oblique.it/images/formazione/dispense/vittorini_politecnico.pdf)) による.
- 7) サルトルとヴィットリーニの関係については以下の研究に詳しい。V. d'Orlando, « Un engagement, deux méthodes : le débat entre Vittorini et Sartre dans *Il Politecnico* et *Les Temps Modernes* », in *Transalpina* n° 1, Presses Universitaires de Caen, 1996, pp. 159-178. Ada Tosatti. « Sartre e Vittorini : engagement e “nuova cultura” ». *Intellettuali. Preistoria, storia e destino di una categoria*, Nino Aragno, 2010.
- 8) サルトルもそのメンバーではあったが, その場にはいなかったようだ.
- 9) « Alcune domande a Jean Paul Sartre e a Simone de Beauvoir », *Il Politecnico*, julio-agosto, 1946, pp. 33-35.
- 10) Italo Calvino, « Progettazione e letteratura », *Una pietra sopra*, Torino,

Einaudi, 1980, p. 145. イタロ・カルヴィーノ「ヴィットリーニ——投企と文学」『水に流して カルヴィーノ文学・社会評論集』（和田忠彦・大辻康子・橋本勝雄訳）朝日新聞社、2000年、p. 195. ただし、この部分は拙訳による。

- 11) Elio Vittorini, « Perché si scrive » (1965), in *Letteratura arte società. Articoli e interventi 1938-1965*, a cura di Raffaella Rodondi, Torino, Einaudi, 2008, pp. 1112-1113.

- 12) この件については以下の論文に詳しい。佐藤（平岩）典子『『国際雑誌』の試みと挫折——ブランショたちの「来るべき雑誌」』『仏語仏文学研究』第36号。

- 13) ヴィットリーニとフランス知識人全般の交流については次の論考に詳しい。

Olivier Forlin, « Médiation culturelle, débats et affrontements idéologiques après 1945. La réception de l'œuvre d'Elio Vittorini par les intellectuels français », *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, 2006/3 (N° 53-3), p. 77-99. ヴィットリーニが全国作家委員会（CNE）のお歴々に対して失望したことはすでに触れたが、その後に会ったクロード・ロワに連れて行かれたサン＝ブノワ街のマルグリット・デュラス宅で、こちらも共産党員ではあったが、より若い世代に属するディオニス・マスコロ、ロベール・アンテルム、エドガー・モラン、クロード・ロワなどとは意気投合したという。実際、『ポリテクニコ』の活動やヴィットリーニの小説は、ロワ、モラン、マスコロらによって *Action*, *Les Lettres françaises*, *Europe* などの紙上で紹介される。また、デュラス夫妻たちはその後、数年にわたって夏のヴァカンスをヴィットリーニ夫妻とともに過ごすことになる。この交流については以下の拙論で触れたので参照されたい。澤田直「マルグリット・デュラスと地中海 廃墟を透視すること」『立教大学フランス文学』46号、2017年3月25日、pp. 85-109.

- 14) 上村忠男『カルロ・レーヴィ『キリストはエボリで止まってしまった』を読む ファシズム期イタリア南部農村の生活』（平凡社ライブラリー、2010）はレーヴィの人の人となりと作品、そしてイタリアの南北問題を知るための必読書である。作品そのものには複数の翻訳がある。『キリストはエボリで止まった』竹山博英訳、岩波文庫、2016。

- 15) *Les Temps Modernes*, n° 14, novembre 1946, pp. 212-237, et n° 15, décembre 1946, pp. 469-496. その後も以下のテキストが掲載されている。Carlo Levi, « La montre », *Les Temps Modernes*, n° 75, janvier 1952 ; « Les paroles sont des pierres », *Les Temps Modernes*, N° 127-128, septembre-octobre 1956.

- 16) 1946年9月21日付けヴィットリーニからレーヴィ宛の手紙、1947年3月25日のヴィットリーニからマッシモ・ミラ宛の手紙を参照のこと。Cf. E. Vittorini, *Gli anni del « Politecnico »*. *Lettere, 1945-1951*, Turin, Einaudi,

- 1977, pp. 71 et 114, cité par Olivier Forlin, « Médiation culturelle », *op. cit.*
- 17) Cf. « 4,000 Parisiens Salle Pleyel », *Franc-Tireur*, 14 décembre 1948. RDR は、サルトルがダヴィッド・ルーセルらと設立した政治団体。この会合にはアンドレ・ブルトン、リチャード・ライト、カミュ、アブダラー・イブライムなどとも参加。ES 204. また、1955 年には、サルトルとレーヴィは、ベルギーのクノックヘイストで開催された東西作家会合 (Rencontre E-W) でも同席しただけでなく、ヴェルコールとともに Société Européenne de Culture (東西欧州の学者・知識人の対話の場として 1950 年に設立された組織) に対して次の会議を共同で提起している。その結果 56 年 3 月 25 日から 31 日までヴェネチアで「東西会合」が開かれることになった。Cf. Antoine Fleury, *Une Europe malgré tout, 1945-1990*, Peter Lang, 2009, pp. 134-135. ES 299-304.
- 18) アルレット・エルカイク編集の 1991 年の初版では、この部分は « Visite à Carlo Levi » とされている。なお、ボーヴォワールの回想録はこの挿話を 46 年の出来事として書いているように読める (FC142/109-110)。一方、『アルプマルル女王』のサルトルの記述には、ルガーノの自転車競技への言及により、1951 年の出来事のように読める。むしろ『アルプマルル女王』はフィクションでもあるので、一概に決めることはできない。Cf. MAEA 1525-1526. これらの点に関しては黒川学「サルトルのローマ あるいはヌーヴェル・プーヴィル」『流通経済大学論集』34 巻 1 号に詳しい。
- 19) « L'universale singolare », in *Galleria*, Sicilia, anno XVII, n° 3-6, maggio-dicembre 1967, pp. 256-258. Cf. ES 456.
- 20) アルベルト・モラヴィア, アラン・エルカン『モラヴィア自伝』大久保昭男訳, 河出書房新社, 1992, p. 286.
- 21) Colette Audry, « L'amour conjugal d'Alberto Moravia », *Les Temps Modernes*, n° 50, décembre 1949 ; Jean Pouillon, « Le mépris d'Alberto Moravia », *Les Temps Modernes*, n° 119, novembre 1955.
- 22) Alberto Moravia, « La Réalité en mouvement », *Libération*, « Sartre », Edition spéciale, supplément au n° 1932, fin avril 1980 ; « Nella società della speranza », *Rinascita*, n. 17, 25 aprile 1980.
- 23) 邦訳『葡萄酒とパン』(齋藤ゆかり訳, 白水社, 2000) は、55 年に全面的に改訂された *Vino e pane* を定本としたもので、訳者によれば別作品とみなすべきとのこと。
- 24) 加藤周一が解説を寄せていることも興味深い。
- 25) 「イタリア語と私」『須賀敦子全集』第 2 巻, 河出書房新社, 2000, p. 435.
- 26) 1930 年代から 70 年ごろまでのシチリアを舞台にしたジュゼッペ・トルナ

トーレ監督『シチリア！シチリア！』（原題 Baaria）（2009／イタリア，フランス）には，グットゥーゾがたびたび登場する。

- 27) 二つのローマ講演に関しては，水野浩二『サルトルの倫理思想』（法政大学出版局，2004）に詳しい。サルトルの講演とそれをめぐる討議は後に『主体性とは何か？』と題されて公刊された。 *Qu'est-ce que la subjectivité*, édition établie et préfacée par Michel Kail et Raoul Kirchmayr, Les Prairies ordinaires, coll. « Essais ». ジャン＝ポール・サルトル『主体性とは何か』（澤田直・水野浩二訳）白水社，2015。
- 28) 本節の記述は上記『主体性とは何か』の訳者解説と重複する部分があることをお断りする。
- 29) 例えば，以下の箇所。 « Les communistes et la paix », in *Situations*, VI, Gallimard, 1964, p. 107 「共産主義者と平和」（白井健三郎訳）『シチュアション VI』所収，人文書院，1966, pp. 88-89。
- 30) *Qu'est-ce que la subjectivité*, op. cit., p. 5. 邦訳，p. 7。
- 31) ルポリーニの講演は，セルジオ・フィリッポ・マーニの編集によって以下のサイトで読むことができる。 <http://www.fupress.net/index.php/adf/article/viewFile/1972/1894>
- 32) 関連の書類が，ローマのグラムシ研究所のアーカイヴに保管されている。UA130, 131 でタイトルはどちらも « Convegno 'Il problema della soggettività'. Roma 12-13 dicembre 1961.... », 130 は講演準備のための書簡，131 は講演記録で，以下の二点。 1) “Incontro con Jean Paul Sartre (1° bobina parte 1° e 2°) 1961” : trascrizione degli interventi e della discussione. 2) “Dibattito con Sartre. Interventi in francese [...]” : trascrizione con correzioni manoscritte. 3) “Incontro con Jean Paul Sartre 1961 (2° bobina -1° parte 2° parte)” : trascrizione degli interventi e della discussione con correzioni manoscritte.
- 33) 邦訳されている作品としては，エンツォ・パーチ『諸科学の機能と人間の意義』（上村忠男監訳，村上弥生，谷徹，木前利秋訳）法政大学出版局，1991。上村忠男編訳『関係主義的現象学への道』月曜社，2011 などがあるほか，ルドヴィク・ロブレクツ，クラウス・ヘルト，エンツォ・パチ（粉川哲夫訳編）『フッサールの現象学』せりか書房，1978 という共著もある。
- 34) 二人の交流の詳細については，1986 年の「アウト・アウト」誌のパーチ特集号（Attraverso la fenomenologia. L'esperienza filosofica di Enzo Paci）の以下の論文を参照，Pier Aldo Rovatti, « Viaggiatori senza biglietto. Note su Enzo Paci e Jean-Paul Sartre », *Aut aut*, n. 214-215。パーチとリクールの関係については，両者の架空の対談も含むエミリオ・レンツィのエッセイ集がある。Emilio Renzi, *Paci e Paul Ricœur in un dialogo e dodici saggi*, ATi

- Editore, Brescia, 2010.
- 35) « L'esistenzialismo », in *L'espressionismo e l'esistenzialismo*, a cura di L. Rognoni e E. Paci, Edizioni Radio Italiana, Torino, 1953.
  - 36) Enzo Paci, *Diario fenomenologico*, Il Saggiatore, Milano 1961.
  - 37) « Sartre e noi », *Aut aut*, n. 51, pp. 188-189. この特集号のその他の寄稿には、以下のようなものがある。Oreste Borrello, « Ontologia e fenomenologia estetica di Jean-Paul Sartre » ; Paolo Caruso, « L'ontologia fenomenologica. Introduzione alla filosofia di J.-P. Sartre » ; Guido Morpurgo-Tagliabue, « Estetica ed etica in Sartre ».
  - 38) « L'ultimo Sartre e il problema della soggettività », *Aut aut*, n. 67, pp. 1-30.
  - 39) 1964年にユネスコで開催されたキルケゴール生誕百年のシンポジウムにも、パーチはサルトルとともに参加している。
  - 40) *Aut aut*, « Sartre dopo la "Critique" », n. 136-137 luglio-ottobre 1973. パーチは「サルトルにおける否定性 La negazione in Sartre」を寄稿。
  - 41) 「私は雑誌『アウト・アウト』のサルトル特集号を彼に訳して聞かせた。それには1961年に彼がグラムシ研究所で行った「主体性とマルクス主義」に関する発言のテキストと、彼に関する論文がいくつか載っていた」。CA 76/72.
  - 42) Cesare Luporini, « Sartre e i comunisti », *Critica marxista*, aprile 1964 ; *Rinascita*, n. 17, 25 aprile 1980.
  - 43) *Jean-Paul Sartre, Teoria, scrittura, impegno*, A cura di Vito Carofiglio e Giuseppe Semerari, Ediz. dal Sud, Bari, 1985, 264 p ; *De Schelling a Merleau-Ponty. Studi sulla filosofia contemporanea*, Cappelli, Bologna, 1962.
  - 44) 邦訳は『冷たい星』千種堅訳, 河出書房新社, 1971.
  - 45) 彼の著作活動については以下の文献を参照のこと。 *Intellettuali e azione politica / Mario Alicata*, a cura di Renzo Martinelli e Roberto Maini, Roma, Editori riuniti, 1976, pp. 463-503 にはその1937年から66年までの全著作目録が附されている。
  - 46) タルコフスキーの映画の仏訳のタイトルは『イヴァンの少年時代 L'Enfance d'Ivan』。
  - 47) 『ウニタ』紙は、サルトル自身の論考のほかにも、インタビューなど独自の記事も数多く掲載している。1965年、アメリカへの講演旅行を中止したサルトルにその理由を問うインタビューもそのひとつ。ES 412.
  - 48) Jean-Paul Sartre, « Discussion sur la critique à propos de « L'Enfance d'Ivan », in *Situations, VII*, Gallimard, 1965, p. 332. 「イヴァンの少年時代」(海老坂武訳)『シチュエーションⅦ』人文書院, 1965.

- 49) *Filosofo e la politica*, Editoti Riuniti, Roma, 1964. この論集には、「イヴァンの少年時代」の他、フランスでは未発表の論考やインタビューも収録されている。ES395.
- 50) 上村忠男『カルロ・レーヴィ『キリストはエボリで止まってしまった』を読む』前掲書、p. 284.
- 51) Cf. CA 76/72. 『イル・マニフェスト』紙は、アルド・ナトリ Aldo Natoli, ルイジ・ピントール Luigi Pintor, ロッサンダらによって1969年6月24日に月刊誌として創刊され、1971年4月に日刊紙となった。1969年、ソ連のチェコスロヴァキア侵攻（プラハの春およびチェコ事件）を断罪したために、イタリア共産党から《分派主義》として非難され、彼らは除名処分を受けた。ロッサンダは73年の『アウト・アウト』誌「サルトル特集号」に「サルトルと政治的实践」という論考を寄稿している。Rossana Rossanda, « Sartre e la pratica politica », *Aut aut*, n. 136-137, pp. 13-40. また、サルトルの死に際しては、リベラシオン紙に追悼文を寄せている。Libération, « Sartre », Edition spéciale, supplément au n° 1932, fin avril 1980.
- 52) 邦訳はトリアッティ『アントニオ・グラムシ——その思想と生涯』（家里春治訳）青木文庫、1962.
- 53) トリアッティは1948年7月14日に議事堂から出た所をテロリストに襲われ、3発の銃弾を浴び重体に陥るも、一命を取りとめたことがあるからなおさらであろう。
- 54) ピエトロ・キョーディ『サルトルとマルクス主義』（西川一郎訳）合同出版、1969、p. 215.
- 55) TM誌は、このテーマで特集号を組み、キルシュメールとジョヴァンナ・ガリヨがサルトルのバザーリアへの影響を詳しく論じている。Cf. *Les Temps Modernes*, n° 668. Raoul Kirchmayr, « Critique du corps « fou ». L'héritage de Sartre dans la psychiatrie de Franco Basaglia » pp. 2-23 ; Giovanna Gallio, « La découverte de la réalité. Sartre, « maître » de Basaglia », pp. 69-103.
- 56) Basaglia, « Anxiété et mauvaise foi : La condition humaine du névrosé », in *Les Temps Modernes*, n° 668. バザーリアの結婚式のときに友人から贈られたお祝いの品がサルトルの全集だったというエピソードもある。また、バザーリアがフランツ・ファノンからも強い影響を受けたことも付記しておこう。ミケーレ・ザネッティ、フランチェスコ・バルメジャーニ『精神病院のない社会をめざして：バザーリア伝』鈴木鉄忠、大内紀彦訳、岩波書店、2016、p. 33.
- 57) Giovanna Gallio, « La découverte de la réalité. Sartre, « maître » de Basaglia », *op. cit.*, p. 76.

本論文は、JSPS 研究費 15K02390（研究代表者，澤田直）の助成を受けたものであることを記し，感謝します．